無意識の思い込み

■無意識の思い込み

「アンコンシャスバイアス（無意識の思い込み）」という言葉をみなさんどこかで聞いたことがあると思います。アン・コンシャス「無・意識」とバイアス「思い込み・偏見」が組み合わさった言葉です。秋田県における人口減少、特に若い女性の流出原因の一つとして、この「無意識の思い込み」が大きく影響していると以前から指摘されています。たとえば、「少子化は女性の社会進出により非婚・晩婚化が進んだからだ」などです。確かに、日本では女性の社会進出と合計特殊出生率に負の相関があります。ところが、欧米の先進諸国では、女性の社会進出と合計特殊出生率には正の相関があります。日本とは逆です。

しかしながら、実は欧米の先進諸国も、今でこそジェンダーギャップ（男女格差）改善に向けた取組みにより女性の社会進出と合計特殊出生率が正の相関になっていますが、１９７０年代は今の日本のように負の相関にありました。

■少子化は女性の大学進学が原因？

「女性が大学進学すると婚期を逃し少子化が進む」という言説がまことしやかに言われます。しかしながら、最近の日本での研究からこれは間違いであることが立証されています。また、その研究は「少子化の解決には、教育レベルの議論をするよりも、仕事と家庭の両立支援や、労働市場における男女平等など、制度上の壁を取り除くことが大事である」ことを明らかにしています。

かつての日本では女性が４年制大学に進学するのは稀でした。私が学生の頃も全体的にはそのような空気感で、「進学しても短大、20代のうちに結婚し、そして寿退社する」がモデルケースみたいになっていました。

今は、女性が男性と同じように働き、キャリアアップしていくのが当たり前です。それに伴い社会制度の改革も進み、女性が働きやすい環境づくりが着実に進みました。このように若い女性の価値観あるいは人生観が大きく変化しているにもかかわらず、家事・育児は女性の負担となったままです。そして、最近の調査結果は、結婚・出産・育児を希望する若い女性の数が減少し続けている理由の一つとして、日本社会に根強く残る「男は仕事・女は家庭」といった社会規範による性別役割分担への拒否感を浮かび上がらせています。

■隘路

これまでも市は、多くの企業や団体、あるいは人々に協力いただきながらさまざまな人口減少対策を進めてきました。その結果、令和６年は＋５人、令和７年は＋57人と２年連続で社会増を実現しました。ところが自然動態は大幅な自然減のままです。もっとも、少子高齢社会においては自然減は仕方ないことかもしれません。だからといって自然減を低く抑えるための取組みをしなくてもいいといったことにはなりません。ただ、以前のコラムでも述べたように、さまざまな取組みをしてもなお出生数が好転しないのは、これまでの取組みだけでは対処できない問題が根底に横たわっていることを、私たちは再認識しなければならないのだと思います。

■求められる価値観の書き換え

一昨年、市は県と一緒に、ジェンダーギャップ（男女格差）解消に向けた取組みとして講演会やワークショップを実施しました。以前に比べれば、ジェンダーギャップへの認知度は進んでいると思います。ですが、その内容に対する人々の認識には大きなズレがあります。前述のような「女性が働くのが当たり前になったから、女性が結婚をしなくなって子どもを産まなくなった」や「女性活躍を辞め、専業主婦を増やせば少子化は解決する」といったような声が未だに聞こえてくるのがその証です。

人口減少対策のメインターゲットである若者、特に若い女性の生きづらさが結婚や出産のみならず、地方で暮らすことをためらわせているとするならば、過去を知る私たちこそがこれまでの考え方や価値観の書き換えをしていかなければならないのだと思います。

にかほ市長
市川雄次

市政運営から日常の出来事まであらゆるテーマをコラムにしています。過去のコラムは市ＨＰからご覧になれます。